

福岡県立大学看護学研究紀要 第9巻第1号
発行 平成23年12月15日

卒業前に実施した小児看護技術の演習効果

柏原やすみ, 吉川 未桜, 宮城由美子

卒業前に実施した小児看護技術の演習効果

柏原やすみ*, 吉川未桜*, 宮城由美子*

The effects of training program acquiring pediatric nursing skills to graduating students

Yasumi KASHIWABARA, Mio YOSHIKAWA, Yumiko MIYAGI

要 旨

本学の卒業生が就職後に小児看護領域に配属された時、子どもの成長発達に応じた看護技術の提供ができるための準備を目的とし、小児看護技術の卒業前演習を行った。演習は「与薬」「採血」「輸液管理」「吸入」「吸引」「経管栄養」「浣腸」「腰椎穿刺・骨髄穿刺」「事故防止」の9項目とした。演習に対する学生のアンケート調査の結果から演習に対する満足度は高く、その要因として技術体験、少人数制の演習が考えられた。それらから、学生の【就職前に向けての学習意欲の向上】と【臨床で実践することへの不安の軽減】が得られたと考える。しかし、バイタルサイン測定と実習で体験した技術であっても、対象年齢にあわせた技術力、技術の素早さを求められる技術に対し、学生は不安を感じていることがあげられる。今後の課題として、学生の知識度を確認しながら演習を行い、学生の看護実践力を促すよう指導していくことが必要である。今回の演習で小児看護領域への就職を希望する学生のリアリティショック軽減の一助になったと考える。

キーワード：小児看護技術，卒業前演習，リアリティショック

Pediatric Nursing Skills, Training Program for Graduating Students, Carry-Over

緒 言

近年のめざましい医療技術の進歩への対応、医療安全の確保、インフォームド・コンセントへの期待にこたえていくことなどが求められ、これらのニーズに対応していくために、看護師は臨床実践能力を向上させることが必要である。しかし、現在新人看護師の看護実践能力を左右する看護基礎教育での実習時間の減少や入院期間の短縮などによる看護技術の体験の減少と、看護学生の精神的な弱さ・未熟さ、不十分な社会性が加わり、看護学生の能力低下が指摘されている(二宮, 2010)。そのため、新人看護師は学校で学んだ知識・技術と、実際の臨床現場で必要とされる知識や技術の差が大きいことから、リアリティショックを受け、無力感を感じ、その状態を立て直すことができない場合は離職につながる人が多いことも指摘されている(二宮, 2010)。

小児看護の対象は新生児期から思春期と幅広く、言語能力や理解能力が未熟であり個人の成長発達段

階の差がみられる。看護師は、発達段階にあわせ子どもの思いや状況を理解すること、また子どもの最善の利益を考え、子どもと家族が自己決定できるよう援助する専門性がより求められる。特に小児看護技術は、対象の年齢によって身体の高さや反応が異なることから、年齢に応じてケアの方法や説明方法を変える必要がある。また基礎看護技術の応用であり、学生時代の知識・技術と臨床現場で必要とされる知識・技術とのギャップがより大きいと考えられる。小児科新人看護師の予想を超える現実として、対象が子どもであるために技術に伴う困難感や恐怖を感じるものがあげられ、小児科新人看護師は、一般的な看護技術に加え子どもを対象とする技術を必要とし、「無力な自分」の感覚がより大きくなると考えられている(藤好ら, 2008)。また、大学病院に勤務する小児科新人看護師の特徴と就職1年後のアサーティブネスとバーンアウトの変化の研究では、小児科新人看護師は他領域の新人看護師に比べ、就職

* 福岡県立大学看護学部
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395番地
福岡県立大学看護学部 柏原やすみ
E-mail: kashiwabara@fukuoka-pu.ac.jp

2ヵ月後ではアサーティブネスが低く、バーンアウトリスクも高い結果が出ている。これは小児科看護師に子どもとその家族を1つのユニットとした看護をより求められること、発達段階に応じた説明や援助、両親の不安について理解することなどの小児看護の特徴による影響が大きいと考えられている(丸山ら, 2009)。このような現状から、新人看護師への支援は医療機関での新人教育にとどまらず、看護学生から新人看護師へのスムーズな移行を促すための試みが重要である(二宮, 2010)と述べられている。また、臨床での小児看護の実践力や看護師の成長を助けるために卒業前と卒業後に行う教育支援プログラムが開発されている(濱中ら, 2009)。

就職において小児看護領域の病棟を希望し、小児病棟・NICUに配属されている本学卒業生も少なくない。現行カリキュラムの小児看護実習において、実習期間が短いことから学生が実施できる技術であっても実習中にその援助を必要とする対象がいなかったり、その援助場面に立ち会えなかったりと、学生は学内で学んだ技術を実習の場で活かす機会が少なくと考えられる。そのため、就職後に小児看護領域に配属された時、子どもの成長発達に応じた看護技術の提供ができるための準備を目的とし、平成21年度看護師国家試験終了をした学生を対象に小児看護技術の卒業前演習(以下、卒業前演習)を行った。演習前・演習後にアンケート調査を行った結果から、卒業前演習の効果についての一考察を報告する。

卒業前演習概要

1. 演習目的

小児看護技術は、授業内の演習、実習前の演習と限られた時間で学習し、臨地実習においても看護技術を経験することが少ない。そのため卒後のリアリティショックを少しでも軽減しスムーズな新人教育を受けるための卒業時実践能力を備えることを目的とする。

2. 卒業前演習実施時期

卒業1週間前に1日、9時から16時までの6時間で、演習を実施。

3. 卒業前演習実施内容(表1)

卒業前演習は、「与薬」「採血」「輸液管理」「吸入」「吸引」「経管栄養」「浣腸」「腰椎穿刺・骨髄穿刺」「事故防止」の9項目を行った。「与薬」「採血」「輸液管理」「吸入」「吸引」「経管栄養」「浣腸」の項目は知識の確認と実技演習を行い、「腰椎穿刺・骨髄穿刺」は検査時の看護についての説明を行った。「事故防止」では、新人看護師に多いインシデント・アクシデントの事例を挙げ、新人看護師の行動についてディスカッションをした。

方法

1. 調査対象

平成21年度卒業する福岡県立大学看護学部の学生の中で、演習受講希望の6名。

表1. 卒業前演習実施内容

演習項目	実施内容
与薬	・経口与薬での指示(5R)確認 ・散剤の溶解 ・事例の患児への与薬方法の選択
採血	・小児の駆血帯の巻き方、清潔操作などの基本的知識の確認 ・小児腕モデルを用いた翼状針での採血方法 (物品準備、翼状針の穿刺、穿刺時の小児の抑制方法を含めた体験)
輸液管理	・小児への薬剤投与の影響と注意点の説明 (年齢による体格差と薬剤投与量の違い、点滴速度計算、微量の薬液量について) ・輸液ルート作成と薬液をルートに満たす方法の実施 ・持続点滴の固定方法の実施(小児モデル人形を用いて) ・注射器で薬液をひく練習
吸入	・吸入器の種類と吸入方法と吸入時の患児への援助について説明 ・超音波ネブライザーとジェットネブライザーの体験
吸引	・モデル人形を用いて吸引チューブの挿入方法と吸引圧の説明、実施
経管栄養	・小児における経管栄養についての基本的知識の確認と注意点 ・小児での注意点の説明 ・モデル人形を用いて、経管栄養チューブの挿入・チューブの固定、チューブ挿入後の確認方法の実施
浣腸	・ディスポーザル浣腸器からシリンジへの浣腸液の移し方と小児の浣腸方法の説明、実施
腰椎穿刺・骨髄穿刺	検査時の看護についての説明
事故防止	新人に多いインシデントやアクシデントについて

2. 調査方法

小児看護技術の卒業前演習実施前後に無記名の質問紙を配布し, 回収は後日研究室前のボックスに提出とした。

3. 調査内容

・演習前調査

就職に当たっての不安について (選択肢), 演習への期待 (自由記述)

・演習後調査

参加満足度とその内容 (満足度は選択肢・内容に関しては自由記述), 演習で実施した技術体験で役立つと思われる技術 (選択肢), 演習内容以外で実施しておきたい内容 (自由記述)

実施時期・実施時間は適切であるか (選択肢), 事故防止の時間の内容は役に立つ内容であったか (選択肢), 演習に対する感想 (自由記述)

4. 倫理的配慮

演習実施前に調査及び提出に関しては自由であること, 不参加であっても何ら不利益を生じないこと, また成績には何も影響がないことを口頭で説明した。調査用紙は無記名とし, 提出でもって研究協力の承諾を得た。

5. 分析方法

選択回答については単純集計し, 演習後アンケートの自由記述においては内容を抽出し, 共通性に着目しカテゴライズした。

結 果

対象者は6名で, 全員女性であった。また, 全員から演習前・演習後の質問紙を回収した (回収率100%)。

1. 演習前調査

就職するにあたり最も不安なことは, 「知識の不足」3名, 「看護技術の未熟」2名, 「複数患者への対応」1名, 「人間関係」「夜勤」「一人暮らし」は0人であった。また, 演習に対する期待としては, 自由記述より「臨床での優先順位に応じた迅速な対応ができるための実践力が養えること」, 「就職したときに少しでも不安が軽減するような演習」, 「技術の復習を通して, 就職前の不安を軽減」, 「看護技術の獲得」, 「自分に何が足りないのかを再度確認し, 就職後に活かす」, 「就職前に少しでも自信がつくこと」であった。

2. 演習後調査

演習に対する満足度の選択肢を「大変満足」「やや満足」「やや不満」「不満」と挙げ, 結果は全員が「大変満足」であった。

演習で行った看護技術の演習において, 臨床で役立つと思われる小児看護技術の上位3つを選択する質問に対し, 「採血」5名, 「輸液管理」4名, 「経管栄養」4名, 「吸入」0名, 「吸引」1名, 「浣腸」1名, 「与薬」3名であった (図1)。演習の内容以外に実施しておきたい看護技術の回答では4名が「バイタルサイン測定」と答え, 「なし」の回答が2名であった。また, 実施時期・実施時間についての回答は選択肢を「適切」「不適切」と挙げ, 全員が「適切」と答え, 事故防止に関しては選択肢を「役立つと思われる」「あまり役立たないと思われる」「わからない」と挙げ, 全員が「役に立つ」と答えた。

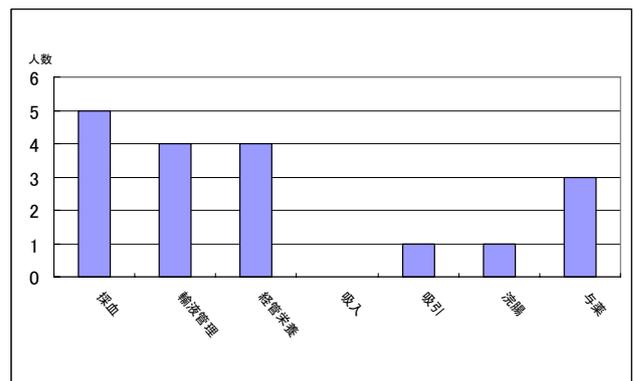


図1. 臨床で役立つと思う演習技術項目

3. 演習に対する自由記述内容

「演習に対する感想」の自由記述内容から26の内容を抽出し, 5つのカテゴリーに分類した (表2)。

学生の記述の中には, 【小児看護技術体験への満足】に関する記述が8件あり, 「卒業後絶対に必要だと思う内容ばかりですごく充実していた」「臨床で働く前に必要最低限の看護技術であった」「内容も実践的でわかりやすかった」「処置だけでなくその準備の重要性も実感できた」「今まで技術演習をほとんどして来なかったので, 就職する前に最低限でも技術を復習できた」「国家試験の勉強で得た知識と結びつく点があり, より知識や技術を深くできた」「就職前に技術の確認をする機会ができた」「演習では2~4年次の復習だけでなく, 新しい知識も増え, とても満足できた」であった。【少人数演習での学びの効果】に関する記述は7件あり, 「少人数授業で理解

表2. 自由記述カテゴリー分類内容

カテゴリー	記述内容
小児看護技術体験への満足	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後絶対に必要だと思う内容ばかりですごく充実していた。 ・臨床で働く前に必要最低限の看護技術であった。 ・内容も実践的でわかりやすかった。 ・処置だけでなくその準備の重要性も実感できた。 ・今まで技術演習をほとんどして来なかったので、就職する前に最低限でも技術を復習できた。 ・国家試験の勉強で得た知識と結びつく点があり、より知識や技術を深くできた。 ・就職前に技術の確認をする機会ができた。 ・演習では2～4年次の復習だけでなく、新しい知識も増え、とても満足できた。
少人数演習での学びの効果	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数授業で理解がすごく深まった ・少人数での演習であったため、わからない部分もきちんと解決することができた。 ・就職前のことを想定して基本的なことを少人数で学べたのでとても勉強になった。 ・少人数での演習だったので、細かいところまで指導され、とても学びが多かった。 ・ひとりひとりに丁寧な指導で、よりわかりやすかった。 ・あやふやであった知識が確認することができた。 ・少人数で実施していただけたので自分のペースで自分の分からないことを質問できたので環境的にもすごく良かった。
就職に向けての学習意欲の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の演習を受けて4月までに技術の勉強や基礎の勉強をしなければいけないと感じる良いきっかけになった。 ・国家試験の勉強で知識はある程度は学んだが、実際の技術的なことは忘れていたり、全く分からなかったことばかりだったので、改めてこれから学ばないといけないことを実感した。 ・4月から不安がたくさんあるけど、今日学んだことを1つでもこれからにつなげていけるよう復習して4月を迎えたいと思う。 ・国家試験の勉強で学んだことも演習に出てきて、国家試験の勉強は無駄ではなかったと感じることができた。 ・これからの就職前の事前学習にも意欲がわいた。
臨床で実践することへの不安の軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・不安が少し減った。 ・今まで実習で見た事はあったけれど実施した事はなかった事を実施する事ができて、少しだけ不安が軽減した。 ・臨床に出る前にこの演習があったことで、臨床への不安が少しやわらいだ。 ・今回の演習で就職前のすさまじい不安が少し減らせたと思う。
他	<ul style="list-style-type: none"> ・就職したら分からないことばかりだと思うけど、ちゃんとプリセプターの先輩方に聞いて確実な医療を提供できるようにしていきたいと思う。 ・「こういうのを知ってほしい、こういうインシデントがあった」など現場での生の情報が聞けてとても良かった。

がすごく深まった」「少人数での演習であったため、わからない部分もきちんと解決することができた」「就職前のことを想定して基本的なことを少人数で学べたのでとても勉強になった」「少人数での演習だったので、細かいところまで指導され、とても学びが多かった」「ひとりひとりに丁寧な指導で、よりわかりやすかった」「あやふやであった知識が確認することができた」「少人数で実施していただけたので自分のペースで自分の分からないことを質問できたので環境的にもすごく良かった」であった。また、【就職に向けての学習意欲の向上】に関する記述が5件で、「今日の演習を受けて4月までに技術の勉強や基礎の勉強をしなければいけないと感じる良いきっかけになった」「国家試験の勉強で知識はある程度は学んだが、実際の技術的なことは忘れていたり、全く分からなかったことばかりだったので、改めてこれから学ばないといけないことを実感した」「4月から不安がたくさんあるけど、今日学んだことを1つでもこれからにつなげていけるよう復習して4月を迎

えたいと思う」「国家試験の勉強で学んだことも演習に出てきて、国家試験の勉強は無駄ではなかったと感じることができた」「これからの就職前の事前学習にも意欲がわいた」とあり、【臨床で実践することへの不安の軽減】に関する記述は4件あり、「不安が少し減った」「今まで実習で見た事はあったけれど実施した事はなかった事を実施する事ができて、少しだけ不安が軽減した」「臨床に出る前にこの演習があったことで、臨床への不安が少しやわらいだ」「今回の演習で就職前のすさまじい不安が少し減らせたと思う」とあった。その他、「就職したら分からないことばかりだと思うけど、ちゃんとプリセプターの先輩方に聞いて確実な医療を提供できるようにしていきたいと思う」「『こういうのを知ってほしい、こういうインシデントがあった』など現場での生の情報が聞けてとても良かった」と2件の記述があった。

考 察

1. 小児看護技術体験に対する満足度

峰村らの調査において、看護技術の到達度に影響することとして、「実習での技術の経験の有無」「経験回数」が挙げられている(峰村ら, 2009)。今回の卒業前演習で行った小児看護技術のなかで学生が就職後に役立つと思われる技術として「採血」5名、「輸液管理」4名、「経管栄養」4名をあげた。これらは実習の中では見学にとどまる技術であり、学生によっては実習施設の特性から見学できない場合もある。学生の満足につながる意見の中で「今まで技術演習(経験)をほとんどしてこなかったため、就職する前に最低限でも技術を復習できた」ともあり、経験の少ない技術を卒業前演習に取り入れることが学生の満足度につながることの1つであったと考える。一方、「吸入」に関しては0名であった。小児看護実習では、急性呼吸器疾患の患児を受持つことが多く、採血・輸液管理とは異なり見学のみにとどまらず、実習中に吸入時の関わりなど介入した経験があることがこの結果に結びついていると考える。また、「国家試験の勉強で得た知識と結びつく点があり、より知識や技術を深くできた」とあり、実習・国家試験を終えた時期に卒業前演習を行うことでより自ら得た知識と体験を結びつけることができ、学生の満足につながったと考える。

演習の中で指導を受けたかった技術として4名の学生がバイタルサイン測定とあげていた。バイタルサイン測定は実習前に演習を行い、病棟実習や外来実習の中では学生が実施できる技術として行うことができる項目である。しかし、「小児看護技術は、学内演習で何度も人形を用いて行っているが、臨地実習の中で患児としての小児に向かい合った時、はじめて看護技術を経験することになる。乳児なのか、幼児なのか、学童なのか、泣くのか、いやがって母親にしがみつくなのか、学生の想像を超える反応がそこに起こってくる」と言われている(中新ら, 2003)。今回4名の学生がバイタルサイン測定を指導を受けたかった技術と挙げた結果は、小児看護の対象年齢が幅広いこと、また対象年齢によっては、測定の素早さや技術力が求められるものであり、このようなことを実習の中で実際に経験したことから、学生が自らの力に自身が持っていないこと、また不安を感じていることを示すものと考えられる。

学生は患者の状況を真にイメージ化できず、さら

に問題を抽出するアセスメント能力が弱く、観察項目や関連性を踏まえた思考が難しいため、観察・アセスメントに関連する項目の技術習得が低いと考えられている(峰村ら, 2009)。今回は学生の経験・知識は調査していないため明らかではないが、学生の知識度を確認しながら行うことで技術体験の満足にとどまるのではなく、学生に不足している知識に気づき指導することで経験している技術への意識も変わり、卒後の看護実践能力につなげる効果もあると考える。今回の結果から今後の課題としてあげられることは、「処置だけでなくその準備の重要性も実感できた」とあり、実習の中で見学にとどまり自ら実施することができない技術は、学生が「準備の必要性」を感じるのが乏しいことである。患者に侵襲を与える技術の実施は、実施経験がないと、その技術の準備・後片づけの経験も減り、その技術に対する自信も低くなる結果がある。(柏倉ら, 2001) 今回の演習の中で行った看護技術の多くは患者に侵襲を与える技術である。「臨床で働く前に必要最低限の看護技術であった」ともあり学生の中で必要最低限ととらえている技術であっても実習の中では経験することが難しい。このような技術項目は実習の中で見学・一部実施できるよう調整していき、その中で「見ることにとどまるのではなく準備から実施、実施後の片づけまでの一連の流れを意識付けながら指導していく必要がある。

2. 臨床で実践することへの不安の軽減と就職前に向けての学習意欲の向上

新人看護師として臨床現場に出たばかりの時期は、慣れない環境で緊張や不安が強く、学んできた知識を十分に活かすことが難しく、新しい知識と自分が持っている知識を結びつけることも困難に感じる。演習前の調査にて、就職するにあたり最も不安なこととして6名中3名が「知識の不足」、2名が「看護技術の未熟」、1名が「複数患者への対応」とあげ、卒業前演習において学生が期待することとして「就職したときに少しでも不安が軽減するような演習」とあり、また演習後「今回の演習で就職前のすさまじい不安が少し減らせたと思う」ということから、就職直前の学生にとってその不安軽減の1つの方法として技術の獲得が挙げられると考える。今回の演習の時間は1日であり、就職前の必要最低限の項目を実施するには短い時間であったと考える。時間が不十分であることは学生の不安を増すことになるこ

とも考えられるが、今回の演習では少人数制で実施し個別指導をすることで、「わからない部分もきちんと解決することができた」「今回の演習で就職前のすさまじい不安が少し減らせたと思う」と学生の意見からは就職前の不安の増強はみられてはいなかった。また、「今日の演習を受けて4月までに技術の勉強や基礎の勉強をしなければいけないと感じる良いきっかけになった」とあるように、国家試験を終えても不足している知識、また経験不足から技術の未熟さを学生が感じているが、今回の演習を通して就職前に主体的に学習する意欲が持てたと考える。リアリティショックは、新人看護師が入職初期に体験するものとして注目されがちであるが、時期を経ても形を変えて現れる(石毛ら, 2010)といわれている。今回卒業前演習を受けた卒業生に就職後、演習の効果がみられたかの追跡調査はできていない。そのため、就職後、演習の効果を明らかにしていくことが今後の課題となる。

個々の子どもに必要なケアの方法は一つではなく柔軟に考えながら選択すると学ぶことは、自己が学んだ環境と異なる環境で仕事をする際のリアリティショックの防止につながると考えられている(日沼ら, 2010)。今回の卒業前演習は各技術項目の基礎的な技術をおさえることが中心となった。項目ごとに使用する物品の規格の幅広さや月齢・年齢によって技術の方法が異なること、薬剤使用量の違いなど小児の特殊性は説明していたが、演習を受けた学生がその点を理解できているかは定かではない。しかし、演習項目終了後に学生とディスカッションすることで、「就職したら分からないことばかりだと思うけど、ちゃんとプリセプターの先輩方に聞いて確実な医療を提供できるようにしていきたいと思う」と、知識・技術が不足している状態で自分はどのように動くべきかイメージすることができていた。技術項目を個別に並べるのではなく、事例を活用しストーリー性のある状況設定や場面設定を明確にすることの重要性や経験の積み重ねと繰り返しの学習、経験の意味づけとしてのフィードバックの重要性(日沼ら, 2010)や小児看護技術には対象の発達段階や状況に応じて様々なアプローチがあることに学生が気付いたことは卒業後のリアリティショックを防止する一助になる(濱中ら, 2010)と考えられている。本学の学生は小児看護実習の中で実施している項目は少ない。そのため卒業前演習は基礎的な知識・技術の

振り返りをするとともに、実習の中での体験を振り返りながら状況に応じた看護技術を行うことによって、援助時のイメージ化を図り、小児看護領域への就職後のリアリティショックの軽減になると考えられる。

結 論

小児看護技術の卒業前演習を行い、学生の就職前の不安の軽減とともに学習意欲を高める効果が得られた。一方、実習中に全員の学生が実施しているにも関わらず、バイタルサインの測定を卒業前演習の内容として希望した。これは、バイタルサイン測定が対象年齢にあわせた技術力、技術の素早さを求められる技術項目であり、学生が自信を持ってない、不安を持っていることが窺えた。今後、学生の知識度を確認し、状況・場面設定をした演習を行い、学生の看護実践力を促すよう指導していく必要がある。また、今回は調査対象者数が少なかったこと、卒業前演習が就職後にどのような効果があるか追跡調査ができていないことが、今後の課題である。

文 献

- 1) 藤好貴子, 藤丸千尋, 納富史恵, 児玉尚子, 奥野由美子. (2008). 大学病院小児科病棟新人看護師の臨床実践能力獲得への3ヶ月間の経験. *日本小児看護学会誌*, 17(2), 9-15
- 2) 日沼千尋, 濱中喜代, 大木伸子, 中村由美子, 大矢智子, 児玉千代子. (2010). 小児看護の現場で働き続けるための教育支援プログラム②: 効果と課題. *小児看護*, 33(3), 298-303
- 3) 濱中喜代. (2010). 小児看護の現場で働き続けるための教育支援プログラム①: 開発と実際. *小児看護*, 33(3), 296-297
- 4) 石毛紗智, 久保貴巳子. (2010). プリセプターの役割と実際. *小児看護*, 33(3), 320-325
- 5) 柏倉栄子, 石田真知子, 岩見谷生恵. (2001). 看護学生の学内および臨地実習における看護技術経験の有無と自信の程度. *東北大学短部紀要*, 10(2), 91-99
- 6) 丸山昭子, 鈴木映子. (2009). 大学病院に勤務する小児科の新卒看護師の特徴と就職1年後のアサーティブネスとバーンアウトの変化. *日本看護管理学会誌*, 13(1), 92-99.
- 7) 峰村淳子, 山内麻江, 近藤英二. (2009). 看護

学生の卒業時における臨床看護技術の到達度の実態：「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」調査結果より．*東京医科大学看護専門学校紀要*，*19(1)*，3-12

- 8) 中新美保子，田中福恵．(2003)．小児看護学における技術教育の方法論に関する検討－状況設定チェックリスト作成を課題とした学内演習に対する実習終了後の学生の反応－．*川崎医療福祉学会誌*，*13(1)*，37-45
- 9) 二宮啓子．(2010)．小児看護における新人看護師への支援．*小児看護*，*33(3)*，283

受付 2011. 6. 2

採用 2011. 8. 24